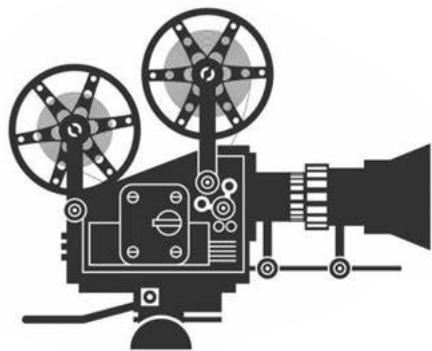




いにしへの映画つれづれ ② 日曜夜の顔だった大人気の「サンセット77」

千葉 豹一郎

題名を聞いただけで、フィンガー・スナップの効いた♫セブニ、セブン（と聞こえた）～♫の軽快なメロディが浮かんでくる。

最近では世界中ですっかりイメージの悪くなったアメリカだが、空前の繁栄を謳歌していた1950年代。日本から見たら夢のような世界が、そこにはあった。「サンセット77」は、そんなアメリカン・ライフをたっぴり見せてくれた。

アメリカでは歴史的に警察への信頼が薄く、探偵の活躍する余地が多かった。今もあるピンカートン探偵社は大統領候補時代のリンカーンの暗殺計画を阻止したことで知られ、軍の警備下となって暗殺された際は、「われわれなら防げたのに」と嘆いたといわれる。

ハンフリー・ボガートが「マルタの鷹」(41)で演じた私立探偵サム・スペードの生みの親ダシエル・ハメットもピンカートンに在籍していたことがあり、当時の経験が作品に生かされている。日本の矢作俊彦氏も同社の社員だったことがある。ハメットと並ぶ

ハードボイルドの開祖レイモンド・チャンドラーが創出した私立探偵フィリップ・マローウも、「三つ数えろ」(49)でやはりハンフリー・ボガートが演じて当たり役となり、探偵界の二大巨頭である。このように、アメリカでは探偵物は小説、映画における人気ジャンルで、「サンセット77」によってテレビの分野でも探偵物の礎が築かれていった。

制作は大手のワーナー・ブラザーズ。戦後間もなくに台頭してきたテレビを各映画会社は敵視し、シネマスコープやヴィスタヴィジョンなど映画館でしか観られない大型画面を開発して対抗した。しかし、テレビの勢いは止まらず、共存を余儀なくされた。それでも警戒感もあって映画会社が直接テレビ制作に乗り出すことはなく、独立プロや系列の会社が番組の制作を担っていた。そんな中、いち早くテレビに進出したのがワーナーで、前後して旧作映画をテレビに大量放出し他社も後に続いた。ワイド版と呼ばれた初の1時間西部劇「シャイアン」も制作し、テレビ界の発展に大きく寄与した。折からの

西部劇ブームに乗って「ブロンコ」「コロト45」「マーベリック」「シュガーフット」などの西部劇を世に送り出し、探偵物の「サンセット77」も類似のシリーズを生み出して一世を風靡した。ちなみに、「マルタの鷹」も「三つ数えろ」もワーナー映画で、トーキー初期に大人気を博したギャング映画など同社はこのジャンルに強い伝統があった。

主人公はCIAの前身に当たるOSS（戦略情報局）のエージェントで外国語の教授だったスチュアート・ベイリー（エフレム・ジンバリスト・ジュニア 声 臼井正明 → 黒沢良）と元政府のエージェント、ジェフ・スペンサー（ロジャー・スミス 声 園井啓介）。ハリウッドにほど近い等地サンセット大通りの77番地に事務所を構え、隣はディーン・マーチンのレストラン「ディノス・ロッジ」がある。ここの駐車場係でいつも櫛で髪を撫でつけている探偵志願のジェラルド・クークスン三世（通称 クーキー 声 河内博 → 高山栄）、紅一点の事務所の電話交換手スザンヌ・ファブレー（ジャクリー



「サンセット77」のEP版。B面は「クーキー櫛を貸して」。



ニッカのCMに登場したエド・バーンズ。衣装も事務所の看板も当時のもの。赤のフォード・エドセルは、マーケティングの大失敗例として語り継がれる。統計を基に開発したが、販売時には既に古くなっていた…。関わったロバート・マクナマラは後に国防長官となり、その数字至上主義がベトナム戦争の大きな敗因のひとつといわれる。

ン・ピア 声 丹羽たかね)、競馬の予想屋で情報屋のロスコー (ルイス・クイン 声 島宇志夫)、ハリウッド署のロイ・ギルモア警部 (パイロン・キース 声 太平透)らがにぎやかに彩りを添えた。

場所柄、芸能界絡みの事件や失踪人探し、時にはギャングや殺人などさまざまな事件が持ち込まれ、探偵の大先輩シャーロック・ホームズにオマージュを捧げた馬の失踪に絡む「銀星号事件」もあった。各回のストーリー自体のおもしろさはもちろん、特筆すべきはそのスタイリッシュさだった。主人公たちが着こなすボタンダウンのシャツや仕立ての良いトラディショナルなアメリカン・スタイルのスーツ。特にベイリー探偵に扮したジンバリストは、タイピンを用いすべストドレッサーのケーリー・グラントにも負けないくらい着こなしが良い上品で素敵なおじ様。スペンサー探偵役のスミスも細身のネクタイに若さを強調したアイビールックのスカットしたお兄様。冷えたマティーニ

に、高級ナイトクラブ、それに毎回登場する綺麗どころ、今から見れば健全なお色気がほのかに漂い“ピンキー・サスペンス”とも呼ばれた。隣の「ディノス・ロッジ」も時々出てきて (セットだったが)、主題曲も演奏しているフランキー・オルテガ・トリオが演奏するシーンや、主題歌を唄うお遊び的な洒落た趣向も楽しめた。中でも一番目を引いたのは探偵たちの乗り回すコンバーチブルだった。ベイリーの愛車1958年型2代目フォード・サンダーバードは、53年発売のベビーサンダーと呼ばれた2人乗りから一気に大型化してラグジャリーとなり時代の先端を行く車だった。この車でベイリーとスペンサーが、駐車場係のクーキーの誘導で外出するオープニングは何ともカッコよくスタイリッシュな番組を象徴していた。スペンサーの愛車58年型のフォード・フェアレーンほ幌だったが、鉄製の屋根が20個ものモーターで折りたたみながらトランクに収納されるモデルもあり、この時代はアメ車が最も

豪華で巨大化したピークだった。こうした車群が続々と登場してアメリカの豊かさを見せつけ、印象深いテーマ曲と共に大ヒットした。「バーボン・ストリート」「ハワイアン・アイ」「サーフサイド6」の兄弟編が次々と生まれ、各々「サンセット77」と同じマック・デビッドとジェイ・リビングストンコンビの作詞、作曲の覚えやすい主題歌で親しまれた。日本でも「避暑地の出来事」(59)などで当時大人気だったトロイ・ドナヒュー主演のマイアミが舞台の「サーフサイド6」が同じTBSで、「ハワイアン・アイ」がNET (現 テレ朝)で放映された。ニューオーリンズが舞台の「バーボン・ストリート」だけが8年遅れで12チャンネルにようやく登場した。そのため“探偵3部作”と呼ばれることが多いが正確には“探偵4部作”である。いずれのシリーズも現地ロケなどほとんどないセットばかりの安直さだったものの、相互にレギュラーがゲスト出演して捜査に当たるなどの気の利いた趣向も寄与して人気を盛り上げ、



日本でも長く親しまれたジンバリスト・ジュニア。幼少時に父と、75年にテニスのチャリティー試合で来日した。



一時は旋風を巻き起こしたエド・バーンズ。

いにしえの映画つれづれ

この成功がスピンオフという形態を後押しした。いずれのシリーズも番組の冒頭とオープニングとエンドロールの最後にワーナー・ブラザーズのロゴマークが3度も大きく出て、大手映画会社の制作であることを印象づけ自負がのぞいた。この中で地味な顔ぶれの「バーボン・ストリート」が1シーズンと短命だったため、主役のリチャード・ロングが同じ役名で「サンセット77」に一時レギュラー入りし、若手のバン・ウィリアムズも「サーフサイド6」にやはり同じ役名でレギュラー入りした。「ハワイアン・アイ」は歌手でもあったアイドルのコニー・ステューヴンスの魅力で見せ、ドラマなどに登場することの少ないニューオーリンズの風俗が描かれる「バーボン・ストリート」もそれなりにおもしろく、個人的には「サーフサイド6」が一番つまらなかったが、人気絶頂のドナヒューのご威光で人気は高かった。元祖だけに「サンセット77」が一番おもしろくて出来も良く、

ブロンドのドナヒューと同じクーキーことエド・バーンズは予想外の人気急上昇。後に探偵に昇格し、後任に「アドベンチャー・ファミリー」(76)のロバート・ローガンがレギュラー入りしたが、探偵となったクーキーはかつてのような人気は得られなかった。それでも1960年代に入っても番組は続き、ベリーの愛車も61年型のサンダーバードのコンバーチブルに代わった。50年代の残滓が感じられた先代からガラリと変わって、先の尖ったロケットを想わせる先進の60年代風の「ロケット・サンダー」と呼ばれたボディースタイルは本当にカッコ良かった。見かけばかりではなく、乗り降りがしやすいよう停車時にハンドルが右上に跳ね上がる機能は驚きだった。このように、内容よりもムードとスタイルで見せたシリーズで、事務所のある場所(当地の地番はすべて4桁で77番地は存在しない)や隣の「ディノス・ロッジ」も観光名所になり、いつか必ず訪れてみたいと

思っていた。「ディノス」の料理もぜひ食して
 みたいと思っていたが、今はなき「映画の友」
 の記事で喉が渇くほど塩辛いだけ（残念な
 がら何を食べたのかは記されていない）
 とあり、幻滅を禁じ得なかった・・。

ところが、前回でもちょっと触れた、テレビ草創期のヒット番組「ドラグネット」の企画、制作、主演で名をはせたジャック・ウェーブが63年にワーナーの制作部長に迎え入れられ、「コンバット!」のライバル番組で視聴率の振るわなかった「ギャラント・メン」などをテコ入れと称して打ち切り、「サンセット77」も主役のジンバリスト以外のレギュラーを全員クビに。愛車はそのままだったが、事務所も古いビルの1室となり、ハードボイルド物に出てくるような普通の探偵物になってしまった。ゲストも「第三の男」(49)のジョセフ・ Cotton のような有名スターを迎え、テーマ曲も変わってセットながら国外にまで出かけて行くなど別番組か



ジンバリストが「サンセット77」の合間に主演した「チャップマン報告」(62)のパンフ。

[illegible]

思うくらい大きく様変わりした。そのため、番組タイトルとの整合性に疑問符が付くなど物議もかもし、視聴者に受け入れられずに1年足らずで64年に終止符を打った。63年までの分は、日曜の夜8時から放送され、後に野球中継の裏番組になったりして9時半に変わり、リピートも混ぜながら68年の3月まで続いて8年間の長きに渡って日曜夜のTBSの顔だった。都会調にふさわしくサントリー（当時は寿屋）の提供で、数々のコマーシャルや予告編の芥川隆行のナレーションなどと共に深く記憶に残っている。64年以降の分は71年に土曜の深夜に放送されたが、以前とのあまりの変わりようもあってあまりなじめなかった。

ちょうど最終回の撮影時に取材で立ち会った元「映画の友」の編集員だったH氏によれば、ジンバリストはテレビの撮影は大変なので終わってよかったという趣旨のことを言い驚いたという。日本のスポンサーが洋酒メーカーなことも知っていて、「僕はこれが好きでね」とグラスを傾ける仕草をするなど大変気さくな人だったそうだ。

すっかり有名になった隣の「ディノス・ロッジ」は、観光名所になったことでかつての顧客だった映画スターらのセレブに見放されながらも70年代終わりまで営業を続け、80年代の半ばに跡形もなく取り壊された。アメリカの負の部分の露呈した92年に起きたロス暴動では、探偵事務所のあった周辺も巻き込まれ、ニュース映像を複雑な思いで見たのを思い出す。出演者たちのその後も三者三様だった。

人気沸騰したエド・バーンズはコニー・スティーンとデュエット、といってもほとんどハモってるだけだったが、「クーキー櫛を貸して」というレコードまで出し時代の寵児となった。無名時代にカーク・ダグラス邸をアポなし訪問。にもかかわらず、ダグラスはその見知らぬ若者を励まし、いろいろアドバイスして撮影所にも紹介し成功も祈ってくれたという。しかし、探偵に昇格したあたりから人気に陰りが見え始め、ギャラ問題な

どで会社とも揉め、あっという間にポシャって三日天下に終わってしまった。ドナヒューも全盛期は短かったがそれ以上で、この手の白い歯をのぞかせ笑っているだけのタイプのスターは急速に時代遅れとなっていた。その後はマカロニ・ウエスタンや「パークにまかせろ」「マニックス」などに昔の名前で細々とゲスト出演し、50年代を舞台にした「グリース」(78)や、「ララミー牧場」のロバート・フラーやドナヒュー、コニー・スティーンらとニッカのCMに出演し徐々に話題になった。良くも悪くも、古き良きアメリカを背負った俳優人生だった。

スペンサー探偵役のロジャー・スミスは海軍時代に、「ミスター・ロバーツ」(55)のロケでハワイを訪れたジェームス・キャグニーに見出され、サイレント時代からの怪奇俳優ロン・チャニーの伝記映画「千の顔を持つ男」(57)のキャグニーの息子役や「メイム叔母さん」(58)などで注目された。「サンセット77」放映中の63年には、スポンサーのサントリーの招きで交換手役のジャクリーン・ビアと来日し、自身の声を吹き替えていたテレビの「事件記者」や松竹でメロドラマの二枚目として活躍中だった園井啓介や丹羽たかね、黒沢良らの声優陣とも対面した。しかし、京都を旅行中にケネディ大統領暗殺事件が起きたため、その陰に隠れてあまり話題にならなかった。その後は、「ミスター・ロバーツ」のテレビ版に主演し、当時人気のアン・マーグレットと再婚。大病を患ったこともあって俳優業から身を引き、妻のマネージャを務めながらジャクリーン・ビセットの「経験」(69)や「CCライダー」の脚本や制作を手がけ、「サンセット77」の脚本も何本か執筆するなどした。元々歌手としても活躍していた66年に再来日し、なかなか多才だったが、重症筋無力症を発症し長い闘病を続けながら2017年に84歳で死去した。

エフレム・ジンバリスト・ジュニアは、名前からも判るように実父のシニアは世界的なバイオリニスト。名門イェール大学の出身で父とは別の道を歩み、舞台を経て「他人

の家」(49)で映画デビュー。監督のジョシュア・ローガンの紹介で56年にワーナーと契約し、「南部の反逆者」(57)や「B52 爆撃隊」(57)などに出演した。本シリーズで一躍人気者となり、リズ・テイラーがアカデミー賞を得たMGMの「バターフィールド8」(60)の相手役に望まれたがワーナーが貸し出さず実現しなかった。65年からは、「FBI アメリカ連邦警察」のルイス・アースキン主任捜査官役を9年間に渡って演じた。「J・エドガー」(13)でも描かれた悪名高い当時のFBI長官エドガー・フーバーの大的お気に入り、直々の指名ともいわれる。知的で紳士然とした誠実な持ち味でFBIのイメージアップに大きく貢献し、フーバーの葬儀では民間人として唯一人FBIの関係者席から見送って、最晩年までFBIの式典にたびたび招かれていた。オードリー・ヘプバーンの「暗くなるまで待って」(67)の夫役や「エアポート75」(75)の機長役などの映画ではテレビより精彩を欠いたが、「FBI」は「サンセット77」の後番組として同時間に放送され、70年代に火曜に移って75年まで続き15年という長期間に渡って日本のブラウン管に登場し続けた。実娘のステファニーも女優となって「007」以前のピアース・ブロスナンと「探偵レミントン・スティール」に主演し、エフレムもゲスト出演して父娘共演も果たした。

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。